東京都における令和２年度のスモン患者検診

中嶋　秀人（日本大学医学部内科学系神経内科学分野）
小川　克彦（日本大学医学部内科学系神経内科学分野）
川上　途行（慶應大学医学部リハビリテーション医学教室）
大竹　敏之（東京都医学総合研究所社会健康医学研究センター難病ケア看護ユニット）

研究要旨

東京都における令和２年度のスモン検診患者の現況を明らかにする。令和２年度のスモン検診の集計から得られたデータを分析し、スモン検診受診患者の現況について検索した。受診患者数は10人（男性；４人、女性；６人）であった。年齢は９人が65歳以上の高齢者であった。診察場所は、３人が対面（保健所・病院など）で、７人が電話問診であった。発症年は「昭和40～44年」が６人と目立ち、重症時も、「昭和40～44年」が６人と多かった（無回答：４人）。発症年齢は６人が15歳以上であったが、「10～14歳」と「幼少時（0～４歳）」がそれぞれ１例にみられた（無回答：２人）。発症時の視力障害の程度は、視力低下の目立つ「眼前指数弁」が２人であるのに対し、「ほとんど正常」～「軽度低下」が７人と多かった（無回答：１人）。歩行障害は全例にみられ、「不能」が５人で、「つかまり歩き」と「不安定独歩」がそれぞれ２人、「一本杖」は１人であった。令和２年度では、視力合併症は８人にみられた。視力の程度では７人が「ほとんど正常」～「新聞の細かい字が読める」であり軽症例が多かったが、３人は「新聞の大見出しが読める」状態であった。下肢筋力低下は８人にみられた。歩行障害は全例にみられ、不能例はなかったが、独歩例は２人で「独歩やや不安定」であった。「要介助」～「つかまり歩き」が５人と多く、「一本杖」が３人にみられた。外出では、不能例はなかったが「近く／遠くまで一人で可能」が７人と軽症例が多く、「車椅子」～「要介助」は３人であった。体幹・下肢の表在感覚障害は７人にみられ、分布では「臍部以下」が６人と多かった。触覚異常と痛覚異常はともに７人にみられた（低下；５人、過敏；２人）（無回答：１人）。下肢振動覚障害は６人にみられ、高度障害が４人と多かった（無回答：２人）。異常感覚は「ほとんどなし」が３人で、中等度～高度が７人と多かった。異常感覚の内容では、「しめつけ・つっぱり感」と「痛み」がそれぞれ５人で、「じんじん、びりびり感」と「冷感」がそれぞれ４人であった。下肢皮膚温低下は全例、尿失禁は６人にみられた。「初期からの経過」では、軽減が４人と多く、不変は２人で、悪化は１人と少なかった（無回答：３人）。「10年前からの経過」では、軽減が１人と少なく、不変が３人、悪化は４人になっていた（無回答：２人）。身体的合併症は９人にみられ、白内障（７人）が多く、高血圧症・消化器疾患・四肢関節疾患がそれぞれ５人であった。脊椎疾患は４人にみられた。障害要因は、「スモン単独」が２人で、「スモン＋合併症」が７人と多かった（無回答：１人）。療養状況では、在宅が７人と多かった。診察時の重症度でも重度例は１人であるのに対し、中等度が５人と多かった。現在、治療は９人で受けており、スモンの治療を受けている患者数は６人で、合併症治療を受けている患者が４人であった。治療内容は６人が内服加療を受けており、注

射は2人と少数であった。「最近1年の転倒」は7人にみられ、「倒れそう」も2人にみられた。一日の生活のうち、「ほとんど毎日外出」～「時々は外出する」が7人で、屋内で主に生活している3人よりも多かった。発症時では、視力障害よりも歩行障害の方が目立っていた。令和2年度では、歩行障害の程度は発症時に較べ改善しており不能例はみられなかったが、感覚障害では、中等度以上の異常感覚が残存している例が比較的多かった。更に、スモンによる後遺症に加え加齢に伴う併発症が障害要因になっている現状がみられた。

A．研究目的

東京都における令和2年度のスモン検診患者の現況を明らかにする。

B．研究方法

令和2年度のスモン検診の集計から得られたデータを分析し、スモン検診受診患者の現況について検索した。

C．研究結果

1．患者の内訳

受診患者数は10人（男性；4人、女性；6人）であった。年齢は9人が65 歳以上の高齢者であった。診察場所は、3人が対面（保健所・病院など）で、7人が医師による電話問診であった。同意は10人全員で取得されていた。

2．発症時の所見

発症年は「昭和40～44年」が6人と目立ち、「昭和35～39年」が2人、「昭和45年以降」が1人であった(無回答：1人)。重症時も、「昭和40～44年」が6人と多かった（無回答：4人)。発症年齢は6人が15歳以上であったが、「10～14歳」と「幼少時（0～4歳)」がそれぞれ1人にみられた（無回答：2人)。発症時の視力障害の程度は、視力低下の目立つ「眼前指数弁」が2人であるのに対し、「ほとんど正常」～「軽度低下」が7人と多かった（無回答：1人)。歩行障害は全例にみられ、「不能」が5人で、「つかまり歩き」と「不安定独歩」がそれぞれ2人、「一本杖」は1人であった。発症後の医療では、「当初より在宅」と「当初入院後在宅療養」がそれぞれ4人であった。また、「入退院の繰り返し」と「在宅主体で時々入院」がそれぞれ1人であった。機能訓練の程度は、「少しはやった」が5人で、「かなりやった」は4人であった。一方で、「ほとんどやっていない」が1人にみられた。

3．令和2年度の所見

(1) 臨床所見

体格では、「ふつう」が6人と多く、「肥満」と「やせ」がそれぞれ2人であった。睡眠は、「ふつう」は3人であったが、不眠は7人にみられた。栄養は、「ふつう」の6人が多く、「やや不良」が3人であった。「良好」は1人であった。食欲は、「ふつう」の6人が多く、「亢進」が1人にみられた。「やや低下」が4人にみられた。

視力合併症は8人にみられた。視力の程度では7人が「ほとんど正常」～「新聞の細かい字が読める」であり軽症例が多かったが、3人は「新聞の大見出しが読める」状態であった。起立位は全例で可能であったが、「一人で可能」は9人で、「支持を必要」とする例は1人であった。Romberg 徴候は4人にみられた(無回答：4人)。歩行障害は全例にみられた。不能例はなかったが、「要介助」～「つかまり歩き」が5人と多く、「一本杖」が3人にみられた。独歩例は2人で「独歩やや不安定」であった。外出では、不能例はなかったが、「近くなら一人で可／遠くまで可」が7人と軽症例が多く、「車椅子」～「要介助」は3人であった。下肢筋力低下は8人にみられ、高度が2人で、中等度と軽度がそれぞれ3人であった。下肢の痙縮は6人にみられ（無回答：2人)、中等度と軽度がそれぞれ3人であった。下肢の筋萎縮は5人にみられ（無回答：2人)、中等度が2人で軽度が3人であった。上肢の運動障害は6人にみられた。握力の低下は2人にみられ、正常も2人であった（無回答：6人)。体幹・下肢の表在感覚障害は7人にみられ、分布では「臍部以下」が6人と多かった。触覚異常と痛覚異常はとも

に7人にみられた（低下；5人、過敏；2人）（無回答：1人）。下肢振動覚障害は6人にみられ、高度障害が4人と多かった（無回答：2人）。異常感覚は、3人は「ほとんどなし」であり、中等度～高度が7人と多かった。異常感覚の内容では、「しめつけ・つっぱり感」と「痛み」がそれぞれ5人で、「じんじん、びりびり感」と「冷感」がそれぞれ4人であった。感覚障害の末梢優位性は7人にみられた。下肢皮膚温低下は全例にみられ、7人は軽度であった。尿失禁は6人にみられた。大便失禁は5人にみられ、5人とも「ときどき」であった。胃腸症状は、7人にみられ（無回答：1人）、そのうち「軽いが気になる」が多く4人であった。「ひどく悩んでいる」は1人で、「多少あっても気にしない」が2人であった。「常に下痢」はなく、「ときどき下痢」が1人にみられた。「常に便秘」と「ときどき便秘」がそれぞれ1人にみられ、「下痢・便秘の交代」が2人にみられた。「しばしば腹痛」が1人にみられた。

「初期からの経過」では、「かなり軽減」～「やや軽減」が4人であり、「不変」が2人で、「悪化」が1人であった（無回答：3人）。「10年前からの経過」では、「かなり軽減」が1人であるのに対し、「不変」が3人で、「悪化」が4人であった（無回答：3人）。

(2) 合併症・治療など

身体的合併症は9人にみられ、白内障（7人）が多く、高血圧症・消化器疾患・四肢関節疾患がそれぞれ5人であった。脊椎疾患は4人であった。骨折は4人にみられた。悪性腫瘍は1人であった。パーキンソン症候はみられなかった。精神徴候は8人にみられ、不安・焦燥が3人にみられた。抑うつは5人にみられた。認知症は1人のみであった。「最近5年間の療養状況」では、「在宅」が7人と多く、「ときどき入院」の3人を上回っていた。障害要因は、「スモン単独」が2人であるのに対し、「スモン＋合併症」が7人と多かった（無回答：1人）。療養状況では、在宅が7人と多かった。「診察時の重症度」でも重度例は1人であるのに対し、中等度が5人と多かった。現在、治療は9人で受けており、「スモンの治療を受けている患者」は6人で、「合併症治療を受けている患者」が4人であった。治療内容は6人が内服加療を受けており、注射は2人と少数であった。

(3) 主に生活状態（介護・介助など）

「最近1年の転倒」は7人にみられ、「倒れそう」も2人にみられた。9回以上転倒する例も2人にみられた。骨折をした例は1人にみられた。怪我をした例は3人にみられた。一日の生活のうち、「ほとんど毎日外出」～「時々は外出する」が7人で、屋内で主に生活している3人よりも多かった。「介護の有無」では、「要介護」が5人で「必要なし」の2人よりも多かった。食事は全員で自立であった。起き上がりは9人で自立であったが、一部介助が1人にみられた。整容は全員自立であった。トイレ動作は9人で自立であったが、一部介助が1人にみられた。更衣は7人で自立であったが、3人では介助を必要としていた。食事は、「不便なし」が多く6人であった。食事に介護を必要としている例は1人であった。入浴は、「介助なし」が5人と多く、「全面的に介助が必要」が3人であった。「入浴できない」も1人にみられた。身体障害者の手帳は9人が有しており、2級；1人、3級；5人、4級；3人であった（無回答：1人）。介護保険の申請は5人で行われており、要介護度は「要支援2」が3人と最多であった。「要介護度1」と「要介護度2」がそれぞれ1人であった（無回答：5人）。訪問介護は3人に利用されていた。また、「訪問看護を利用している」のは2人であった。リハビリテーションでは、訪問リハビリテーションが2人で、通所リハビリテーションは1人であった。短期入所療養介護を行った例はなかった。居宅介護支援は3人に利用されていた。

D．考察

発症時では、視力障害よりも歩行障害の方が目立っていた。令和2年度では、歩行障害の程度は発症時に較べ改善しており不能例はみられなかったが、歩行時に介助や支えを必要としている例が多かった。外出は可能であるが、その一方で歩行時に障害を呈している現況がみられた。感覚障害では、中等度以上の異常感覚が残存している例が比較的多かった。スモンによる後遺症に加え加齢に伴う併発症が障害要因になってい

る現状がみられた。

E．結論

令和２年度の東京都におけるスモン検診受診患者の現況を検索した。現在においても、感覚障害が残存し、歩行障害を呈する例が比較的多くみられた。スモンによる後遺症と加齢による併発症が障害要因になっている現状がみられた。

H．知的財産権の出願・登録状況

なし